

第 3 回技術検討専門委員会における指摘事項・意見への対応

追加調査結果の概要

指摘事項・意見	委員会時回答	対 応
<p>事案現場地下の固結シルト層の遮水性について、ルジオン試験により確認することの技術的妥当性を確認しておくこと。(勝見委員)</p>	<p>事例等について確認します。</p>	<p>固結シルト層の透水係数は低く、通常の現場透水試験で透水係数を把握することが困難と予見されたため、ルジオン値による遮水性評価を行いました。</p> <p>ダムやため池堤体の遮水性確認では、土砂地山に対するルジオン試験の事例はあります。今回の調査目的（遮水壁の根入れ層となりうる遮水基盤の確認）の観点からも、適切な方法と考えています</p>
<p>地下水の上昇に伴った油相の上昇により、土壌が汚染されていると考えられる。浅い部分の土壌の汚染状況を確認する必要がある。(森委員)</p> <p>油相分布の周縁部では、油が流出した分、油相厚さが薄くなっているのか。(加治佐委員)</p>	<p>浅部の油による汚染状況について、再確認します。</p>	<p>資料 3 の表-9 に油汚染の状況を整理しました。</p> <p>現時点では、周縁部から油分が継続して流出しておらず、油層厚さに与える影響は確認できません。</p>
<p>汚染源(高濃度部)の除去を「最優先」としているが、周縁部における河川への汚染拡散防止を「優先」としている。両者はいずれも最優先であり、区別すべきではない。(森委員)</p>	<p>表現を整理します。</p>	<p>汚染源(高濃度部)の除去、周縁部における河川への汚染拡散防止を共に優先とします。</p>

対策工法の概略検討

指摘事項・意見	回 答	対 応
<p>鉛直遮水工法、特に矢板の掘削工法や接合の課題、砂礫・玉石地盤に対するソイルセメント工法での遮水性など、当地の現場・地盤特性を考慮して検討すること。(勝見委員)</p>	<p>多くの制約条件がありますが、技術的には対応可能と考えています。検討結果を、次回委員会で整理します。</p>	<p>各種鉛直遮水工法を当該現場に適用するにあたっての課題等を、第4回委員会資料3「囲い込み工」で検討しています。</p>
<p>浮き型矢板であれば、比重の大きなVOCは対応できないが、囲い込み対象は油相中のPCBのみという前提でよいのか。</p> <p>また、浮き型遮水壁の深度は、地下水位の変動幅等も考慮して、十分カバーできる長さが必要である。(森委員)</p>	<p>VOCの検出は油相に起因していると考えられ、地下水面上の油相中にVOCが残留しているという考え方である。</p> <p>矢板深度については、少し余裕を持った設置が必要であると考えている。</p>	<p>浮き型遮水壁の考え方および深度設定について、第4回委員会資料3「囲い込み工の検討」で検討しています。</p>